

II. 起源神話

A 世界の成立

これらの神話は、世界の実際のありようを本当に知っているつもりで説明したものなのか？
(とくに空間概念)

- ・『神統記』(ヘシオドス BC8c) は、空間世界とともに秩序世界のなりたちを語ったものである。
ゼウスが、武力と知恵で支配体制を完成させるまでの物語。
- ・その中でゼウスが握っている雷は、ゼウスの力を象徴するものとなっている。
- ・タルタロスのトポグラフィは、それがどれだけの距離のところにあるかということではなく、
どれほど途方もないところにあるかを示している。窮極の牢獄。

Cf. ハデス (冥界) のトポグラフィも、論理的思考ではとらえられないような場所にあることを示している。とてつもない隔たりの場

(地理的な隔たりに加えて知覚的な隔たりもあり。Cf. 『オデュッセイア』 11 巻 23-154)

- ・ギリシア神話の描く世界は、
現実の世界を描いたり説明したりすることを目指したものではない。
(自然哲学や自然科学が目指したものとは違う)

現実にとどりうる自然界の物事を土台にして、その上に、
人間が内面的に抱く想念を自由に描いたものと考えべき。

(次ページに資料あり)

次回 人類の成立

Bul. 31-39

Ap. 40.12-41.13

資料

(1) ヘシオドス(『神統記』)によるコスモロジーの概要

- ①【四原初神の誕生】最初に、カオス(空隙あるいは場)が生じ、ついでガイア女神(大地)・タルタロス(大地の奥底)・エロス神という3者が生じた。
- ②【ウラノスの去勢】ガイアがウラノス神(天)を産み、ウラノスと交わって子神たちをもうけるが、ウラノスは出生する子神たちを直ちにガイアの胎内に戻して、ガイアと交わり続ける。ガイアはこれに苦しみ、息子のクロノス神に鎌を与えて父親を去勢させる。去勢によって世に出ることができたこの兄弟神たちをティタン神族という。
- ③【クロノスの支配】クロノスが支配の座に着き、レア女神との間に子神たちをもうけるが、自分の子によって倒されるという予言を恐れて、子神たちを次々に自分で呑込む。このことを嫌ったレアは、ゼウス神が生まれると、代りに石を夫に呑ませた。一年後にゼウスはその「策略と力」によって、クロノスにすべての子神たちを吐き出させる。
- ④【ティタノマキア】ゼウスと兄弟神たちは、ティタンたちと敵対してティタノマキアと呼ばれる壮絶な戦いを長い間続ける。ゼウスたちは、タルタロスに久しく幽閉されていた怪物たちを味方につけることによって勝利し、こんどはティタンたちをタルタロスに閉じ込める。このあと、ガイアがタルタロスとの間に生んだ怪物テュポエウスがゼウスと激しく戦うが、ゼウスは雷という武器でこの怪物をも倒してタルタロスに送る(*)。
- ⑤【ゼウスの支配による秩序】この功績によってゼウスは支配権を得る。彼はメティス女神(智慧)を妻にするが、この妻から生まれる子によって倒されるという予言を聞くと、妻を呑込み、子神(アテナ)を自分の体から出産して支配の安泰を確保する。次にテミス女神(掟)を娶り、エウノミア(秩序)、ディケ(正義)、エイレネ(平和)を産ませ、ムネモシュネ女神(記憶)からはムウサ(詩歌女神)たちを産ませ、レト女神からはアポロンとアルテミスを産ませ…

(2) 神話では世界を空間としてどのように捉えているか

《天／大地／タルタロスの隔たり》 —ヘシオドス『神統記』716-25行より

(ヘカトンケイルたちは)ティタンドもをその矢弾なる巖で被いつくし、路広の大地の下に彼らを送った。辛い縄目で戒めたのだ、軒昂たる意気の彼らではあったが 腕力でもって撃ち負かして。この者どもを大地の下へと送ったのだ、天が大地から離れているのと同じほど地の下はるかなところに。というのも、大地から曖々たるタルタロスまではそれほど遠く隔たっているのだ。すなわち青銅の鉄床が天から九日九夜も落ちつづけてやっと十日目に大地に届くだろうから。さらにまた青銅の鉄床は大地から九日九夜も落ちつづけて十日目によやくタルタロスに届くだろうからである。

(廣川洋一訳)

(3) 古代ギリシア人による、別のコスモロジー

《自然哲学》

タレス：「大地は水に浮いている。」

アナクシマンドロス：世界はある「限定されぬもの」という元素から生じた。

ヘラクレイトス：万物の根底にある単一の元素は火である。

エンペドクレス：万物の始源は水、火、空気と地である。

《神話に対する哲学の見地からの非難》 —アリストテレス『形而上学』1000a5-18より

さてヘシオドスのごとき人々やその他すべての神学者たち(テオロゴイ)はただ彼等自身にとって信ぜられうることのみを考え、我々のことは毫も顧みなかった。けだし彼らは神をもって原理であるとし、すべてを神から生まれたものであるとし…。神話的な姿で語られている見解をまじめに穿鑿することは無駄なことである。(岩崎勉訳)